

戦場の花から平和の花へ

沖縄県立沖縄ろう学校 二年

渡具知 和紀

今年も夏が来た
蝉達の合唱と三線の音色に
「そっ」と耳を澄ます

そして、
一面と青く、羊雲は
休むことなく

時間と共に
流れ続ける。

こんな大空に
私は問う

「あの日もこんな夏だったので
しょうか。」

「人と人を争わせる
そんなものはいらない。」
そう思っていたこの島に

水平線の向こうまで見えていた
海の青さが

一瞬で黒くなった、あの夏。
三線の音色
それに合わせてカチャーシーす
る人々。

「いちやりばちよーでー」
そんな賑やかだったはずの島が
黒い爆弾の雨によって
消えてしまったあの夏。

誰があんな癒えることのない
生涯を想像したのでしよう。
月桃の花
おばあ達は戦場の花と
涙を流しながら
野に咲く花を指す

米軍基地
おじい達は
「基地の中に沖繩がある」と

両手を握りしめながら
フェンス越しに訴える

「戦争って何だろう」
「平和って何だろう」

答えの知らない私達が
今日もこうして

フェンス越しに
問い続ける

一つの答えはきつとない

けれど、確かに忘れてはいけない
平和の礎に刻まれた
二十四万人の名を。
忘れてはいけない

おばあ達が涙を流しながら

話してくれた戦争の事を。
忘れてはいけない
フェンス越しに
「いくさー、いくさー、ならんどー」と
叫び続けるおじい達の姿を。

忘れてはいけない
平和の礎の前で祈りささげる人々
の涙を。

そして
伝えていこう。
おばあ達の記憶で終わらせないた
めに。
伝えていこう。
叫び続けるおじい達の姿で終わら
せないために。

そして、若者よ
動いていこう。

私達ならできる。
平和を求めて
飛び舞う蝶々のように。

私達も
この島から
平和の使者に
なることができる。

「片手さーねー 音ー出じらん」
一人より
障がいあるなしに関わらず
たくさんの人が力を合わせて
初めて

フェンスのない未来を
作ることができる。
平らな世の中(ユヌナカ)を
作ることができる。

六月二十三日
あれから七十三年
犠牲になられた人々の
御冥福を祈ると共に
「平和の使者になる」

ことを私達は
ここで誓おう
おじいやおばあ心の叫び
私の心の耳には
確かに聞こえる

だからこそ、
米軍機が飛び交う
空の下、
今日も私は
叫び続ける
フアンスのない未来を
求めて。